伝わるからだの探求　その⑤

――無縁思考――

釋　潮叡

今年はラグビーw杯が日本で大いに盛り上がっています。ラグビー精神にはそもそも敵味方の概念がないようですが、日本のスクラムユニゾンプロジェクト（対戦国の国歌を一緒に歌う）が世界中から好感を得ています。この発想には仏教徒らしさが忍び込んでいます。これを教団が見いだすことは可能なのでしょうか。

ハンチントンの「文明の衝突」は、ほぼ宗教によるとのアナウンスでした。一方、日本では大本教の万教帰一「文明と宗教の調和ある融合」が謳われてきています。ハンチントンのいう「**文明の断層線**（フォルトライン）」もすでに地図上に明確に引けない状況に至っています。調和の道を取るか、あくまでも衝突し勝ち取っていくか、この二択しかないという認識、果たしてそうなのでしょうか。このロジックには落とし穴がありそうです。

近代は個の独立最終期だったと云えます。これまで自然の流れと乖離した独立による問題に多く苦しみました。だからと言って個性の排除もまた大きな失敗を生んでいます。独立したままで元の流れへ反る。これが今後の人類共通のテーマなのでしょう。「私の自由」から「私からの自由」へのアップデートです。

長者窮子の喩または放蕩息子の帰還などは、迷子を通して現代を予言した気づきのメタファー。世界中に似た神話的物語が沢山あります。現代は近代性によって彷徨う窮子の物語です。

グランディングすることで、心も一時「meOS」から少し離れ、身体のほどけ謬見などの脱落による、判断を加え

ないという念いが広がり「weOS」へとバージョンアップされる。これまででもこれからでもない「ただいま」を受け取ることはdoingからbeing、遠心力から求心力へ、古事記にもある「自ら」から「自ずから」へ、「成そうとする」から「在ろうとする」への転換、これまでの「meOS」による意識的身体的習慣を忘れることにより六入が解け、かつての優しさに包まれた世界が再び訪れる（探求②）。このお釈迦様が啓かれた道にいよいよ人類が強い関心を抱き始めています。八正道の大河に戻っていく物語の、無明との別れの場面に「無縁思考」を意図し、対話というコミュニケーション、宗教対話実践を提案された状況としました。**広い心で受け容れやさしさの中で対話する**法華経の包容力、経王たる本来の役割を三宝のうちに果たすのは我々による諸宗教対話の実践と心得ます。対話＝ダイアログ＝ディアロゴス、ディア＝深める、対話とは「真理探求を深め共に歩む」となります。

昨年は伝道部国際課主催のスタディーツアーに参加致しました。平成十五年、ハワイの街頭法要、ドイツ大聖恩寺諸宗教対話、翌年の全日青ドイツツアー（探求①）以来足掛け十五年、異なる宗教、異なる思想に遭遇することは、未知のウィルスに感染するような印象を持たれますが、現実は全く想像とは異なります。

「人類の理想を実現するためには民族的、国家的、イデオロギー的或いは**宗教的自我**を超越した高い次元と理念による自己革新が必要であり、そのために先ず各宗教が確執を去るべきである」

これは昭和四十年の世界連邦協会（湯川秀樹会長）世界大会における身延山法主藤井日静上人の提案であり、すぐさま採択され、初めて宗教委員会設置が実現しました。昭和四十四年の身延山を会場とした第一回世界連邦平和促進宗教者大会では諸宗教の代表二千人が一堂に会し、諸宗教対話が実現したことは、単に特質した宗教大家だったからなのでしょうか。これは、想像を絶する大革新と謳われた、「排他的姿勢を止め、諸宗教の存在を認め積極的対話に

勤める」ことを世界に宣言した、カトリック教会「第二バチカン公会議」の四年後のことです。さらに翌年には「諸宗教が、従来の**排他独善的なあり方を深く反省**し、寛容の精神に基づく積極的な出会いを推進する」ことを目的とした世界宗教者平和会議が立正佼成会 庭野日敬開祖により設立。私はこれらを諸経典における法華経の役割に関係すると捉え、**法華経との対話の深まり**によって目覚める活動であろうと捉えました。今や**イスラム教が主導**する宗教対話センター（KAICIID）が存在します。諸宗教対話部門が設置されていない教団運営のコンプライアンス、CSRについて考慮する必要が出てまいりました。

「自分の**エゴイズムを捨て相手を信じ仰ぐ**信仰」という諸宗教対話理念。これは現在宗門が展開する合掌礼・但行礼拝の教えに一致すると考えます。

「自らの信仰理念に妥協せずして、深く広い容認度を見いだせる教団は、低く狭い容認度にとどまる教団より、明らかに優れた教団である」との評価に異論を唱える人はないでしょう。救いをもたらす対象が、出家者→信仰者→世俗者（無信仰者）へと移りつつあります。宗教間における対話から、宗教者と世俗者の対話へと移り、教義的一致に取り組む対話から公共善を見出す対話へとテーマが移っています。

世界を席巻する「GAFA」、単にMBRSの実践ばかりではなく企業理念、社内共通価値観、商品開発を仏教で行なっています。

闘諍堅固とは、今や教団間ばかりではなく、あと約四半世紀で訪れるとする新時代のパラダイム構築にいかに貢献するか、お寺と僧侶の役割は正念場に差し掛かっています。

ことばにある場所や記憶を超える力。出来事の点をロジックの線で繋げた記憶からの自由性が必要なスキルとなります。

ハーマンのＯＯＯ（トリプルオー）は無縁思考に近く、無明による編集加工、さかしまな抽象と捨象。要素還元的（下方解体）概念化を超える方法です。

「さとり」を再翻訳すると「持続的非記号的体験」となるそうですが、**無縁思考とは思考と無縁な指向、自分の思いや考えの仕組みに囚われない思考、ＡＩには抽出されない思考**です。

ダマシオが近代思想創始者の一人「デカルトの誤り」に言う「洞察」、また「思弁」。

さらに、意識というものは論理的知性によって構築された現実であり、それによって無意識の存在も確立しています。その論理的知性に基づかない知性へのとっかかりを無縁思考とします。論理的知性を否定すればそれは言語が全滅するわけですが、日本語にある、論理を超える地平に活路を見出してきました（探求①）。今後の社会は、東洋的、仏教的な思考法を採用する可能性が高まっています。多くの人々が各お寺、各僧侶にソフトなアプローチをし始め、今でいうスポーツクラブ化が予測されます。

近代思想は聖書と深い縁を持ちますが、キリスト者がすでに脱近代的であることも明らかです。カトリックとプロテスタントの修道士によって構成されるテゼ共同体は**宗教者と無宗教者の信頼と共存**に取り組む先進的宗教共同体ですが、ブラザーアイロス院長は「互いを結びつけることと、一つになることは同じではありません。結びつけることはテクノロジー（技術・能力）によります。一つになることは連帯することによります。連帯は地球規模な問題を解決するための土台にならなければなりません」と語りかけます。十～二十代に好感触を与え、毎週世界中から何千人もの若者が訪れ、長い祈りと対話の時間を過ごします。

カミュ発信の「受け手の気分」はハラスメント思考へと発展し、「論理的判断を下すmeOSをバージョンアップしよう」、「組織における規則に従っていても必ずしも身の安全は保証できない」、「組織・集団・国家の政治的統制力の

無効化」など、絶対的価値についての見直しへと駒が進んでいます。

コンプライアンスが重要視され、集中砲火、炎上が起こり、説明責任、謝罪をしいられる光景を目にします。これらは法律に抵触しないもの、明文化されない空気感による「社会的生命」のやり取り。情緒が決定権を持つ社会です。多様性を尊重しながら、それでいて一致（統一や融合や均一や排他的ではない）の連帯を生む秩序創出が求められます。連帯とは一方的な強制力によらず、個々の主体性によるものです。

明治期に喪失した陰陽五行思想との相互作用と付随する格義仏教の誤解、仏典翻訳に見る宗教対話、ウパデーシャの再考、相互作用の研究における陰陽五行思想などに糸口を見ます。

陰陽五行思想のテキスト易経は、占書と誤解され焚書坑儒を免れました。「鼎」という卦は周公旦の人物像を教えています。異体同心の卦「同人」には「野においてす」とあり、野とは、城壁の外のこと、城壁とは組織の中だけで通用する価値観やルールの喩。野とは先行する条件（縁）を前提にしない内的外的環境、その立ち位置と姿勢によって初めて異体同心が立ち上がる。これが無縁思考です。この卦は、ふさがった世を打開する方法を説く卦でもあり、羲農の世（陰陽五行の祖伏羲と神農が治めた理想的古代社会）と並び語られる大同の世を建設する思想の骨格です。

バックミンスタフラーの「宇宙船地球号操縦マニュアル」は、世界連邦運動、ＷＣＲＰの理念と重なります。**闘諍堅固を受け入れつつ、それでいて殺戮し合わない道のヒントがあります。**ケン・ウィルバーはすでに「地球環境の状態を正直に受け止めて、人類が共有する意識の表現と真摯に受け止め、行動を改める」ことを発信しています。

狩猟採集→農耕備蓄→工業資本→情報流通→こころへと移ってきた時代性は、「からだ」となると予測しました。

均一化・分業化・同時化・極大化・集権化・マニュアル化の終焉を説いたトフラーに倣い、優陀那日輝和尚へ尊敬の念を持って「ペリー（黒船）来朝せり、わが教法（の受け取り方）も、一変せんや」を改めて読み解きます。現代における黒船とはなんでしょうか。

この前代未聞の大変革の潮流の中で操舵不能にせしめる魔物は今採用している思想価値観（近代思想ＯＳ）です。それを超える為の好ましい環境が対話思考であると考えます。

言葉のリズムは、狩猟・農耕・機械・ＰＣと様々です。経典は一行十七字（俳句・発句と同じ）、やまとことばは一音一拍、読経は一字一拍。ＡＩが写し取れる言語ではなく、モノとモノ、モノと言葉、言葉と言葉にある不可思議な一致、生命力の距離ゼロ作用を起こす日本的知性（探求④）。今採用されている論理的、情報管理的思考法、意識的情報処理と伝達はＡＩの射程範囲内。逆に神話的読み解きは頼もしい味方です。

トマトとサンドイッチと眼鏡と海老とノートパソコンの一致点を見出す思考性、ピタゴラスの音階における八音目を同音とする音感。異なる存在の中にある距離ゼロ地点を見出す人類特有の知性。宗教を支える土台に活路があります。

闘諍堅固を価値転換する闘い方改革。その手掛かりとなるのが宗教対話です。

腕力から火器→空間→時間→知識→智慧と次第に闘い方は進化しました。

「相手を打ち負かすより、相手を向上せしめる行為を選ぶ」ことが仏教にある智慧と慈悲による闘いであるとの気づき。戦いであって誰も心身ともに死傷しない戦いであることは誰が見ても一目瞭然です。

紀貫之が示すように日本人は古来より、優れた戦争の止め方を心得ていました。世界に誇るべき高度な知性です。

パワーバランスからパワーシフトへと局面は変わります。

これを日本と仏教に対する尊敬の念を込め「ANATA.mvt（貴方ムーブメント）」と名付け公共善対話の合言葉として世界中に伝わることを念願します。

宗教対話の現場に参加し、信仰と帰依の距離ゼロ地点における異なりから自分について学ぶ体験をいたしました。その中での聞き書きを紹介します。

☆対話とは、相互的なコミュニケーションで、一方的な主張ではない。

☆相互的コミュニケーションには、議論、ディベートもある。これらは自分の主張の正しさ、相手の主張の間違いに意識を向け言い当てる技術により、相手を打ち負かし、自分の自己正当性をのみ証明する方法で、対話ではない。

☆自分が信じる教えを広める目的が「人類全体の究極の幸福」ならば、必ず宗教対話を実践する。

☆対話は、救急車ではない。また対話においては異なりのテンションがより深い信頼の創出となる。

☆出逢った他人とその印象は距離ゼロ地点に立ち無縁思考をすることで、その相手を通して自分に気づく。出逢った相手に抱く印象はその相手から伝わってくる情報によるものではなく、自分が自分に抱く自己イメージがそのまま相手に抱く印象となる。つまり、他者（異教徒）との出会いは、自分について学び、自分に対する安心、自己確信を得るもの。**この他人とは何か、についての理解**によって初めて対話が実現する。

☆あと四半世紀に満たないうちに、人類は大きな思考の改変を遂げる。宗教の力を借りなくても、何ら、日常生活と人生上において困ることがない程に、これまでの人類特有な精神、世界の矛盾と破綻を根底から癒す方法を開発し終わる可能性が高い。宗教者がこの取り組みを傍観するならば、予想をはるかに超える打撃を被る。

明治二十六年シカゴ万国宗教会議（探求④）大会委員長バローズ牧師の歓迎の挨拶「諸君、ねがわくは、一宗一派の偏見を捨てて、互いに相敬愛し、真理の生命をして健康ならしめて下さい」とのコメントは日蓮大聖人の言葉に聞こえます。

異なりの中の同義なるものを開き会わせる思考、非論理的知性、**感覚的印象に無縁なる体験的知性（脳科学が語る大脳頭頂葉の心）**についての仏教の見解が注目されています。

お寺は衰退していますが、人類規模では宗教熱が大きく再燃しています。

お参りが減った、日本人の信心が薄れたとの嘆きは、室町期からの緩慢な流れ。先立つこと約五百年、日本は欧州より宗教的自律が早かったと受け取れます。日本人の宗教的態度は世界的話題ですが、宗教的に恵まれた環境風土と、何でも自前で出来るようになる日本人の内的風土に培われ、自律性により磨かれたある意味成熟した宗教観と捉えることができます。

近代において宗教は完全に終焉へと向かうとされてきましたが、イギリスとフランスで起きた「悪魔の詩」と「服従」をめぐる出来事によって明らかとなった超国家的宗教力は、再燃に拍車をかけました。

「自分と違う意見を唱える他者＝自分の敵」、「自己正当性を主張する＝自分の安全保障」という有縁思考から醒めることを求められます。

陰陽五行思想に深い示唆を与える研究者であり、対話の権威でもあるハーバーマスは、教義言語を世俗言語に置き換えるトランスレーションを公共善を見出す条件に挙げ、これを人類規模の問題を解決する宗教対話のプロセスとしています。「未信徒」という言葉に対する課題を暗示します。今後のお寺は「信仰対象を共有しない人、既存の教団

の枠にはまらない信仰をする人々に対する貢献」が実業の現場となります。国家政策に始まった宗教の世俗化は、国家統制力の緩慢な喪失へと至りました。**「聴くこと、つまり諸々の異なりを多声的に相互作用性を見出し受け入れることが重要である（ハーバーマス）」**と指摘をしています。

お寺がかつて無縁処の役割を果たしていたことは大きなヒントです。条件によって人を分別しない、人の存在する意味や価値を定義付けし形式論理に則って機械的に固定化しない、如何なるものからも常に最高の慈悲を引き出せる叡智に包まれた場はとても魅力的に映ったでしょう。

二千数百年滑らかに各時代各国各思想性の縛りを超え伝わってきたお釈迦様の言葉を、日本におけるわずか一五〇年ほどの近代的思想性に固執することによって、無力化するようなことがあってはなりません。

宗教性を脱色した瞑想が今西海岸で正念場を迎えていますが、これは近代的思想と結びついて起きている問題です（探求①）。否定的に捉える意見もありますが、「宗教を脱色する」というこの辺りに我々の大きな役割が眠っているようです。かつて近代の波が押し寄せたとき、従属せず生き残るために取った方策が険峻とそびえています。**現代宗教研究所刊行書籍「日蓮宗の近現代」**はその貴重な杖となります。

ドイツでは官民連携による外交交渉が始まり、宗教者がその任についています。もう一つの顔ではなく、僧侶としての公的活動が始まる兆しが見えます。

最後はこの探求を導いた偉大なる行者の言葉で締め括りと致します。

◎優れたリーダーほど部下と対話する

独断すべからず、必ず衆と與に宜しく論ずべし。（中略）故に衆と與に相弁えれば、ことば則ち理りを得ん。

聖徳太子

◎ディベートの愚かさをすでに説いている

（宗教者たちは）各々の教義に固執した論争をし、（中略）「論敵は愚か者で、真理に達した人ではない」と主張する。

彼らは自らの見解をのみ真実であるとみなし、故に他人を「愚者」であると決めつけるのである。

「真理は一つであって第二のものは存在しない」という真理を知った人は、争うことがない。彼らはめいめいに異なった真理を褒めたたえている。それゆえに諸々の人は同一のことを語らないのである。　スッタニパータ

◎諸宗教対話推進最古の言葉

他の人々の宗教は、尊敬に値する。他の宗教を敬うことは、同時に自分の信仰を敬うことになる。自分たちの礼拝の場で、自分の信仰ばかりを賞賛し、他者の信仰を中傷するならば、その人は、自分自身の信仰に対する重大な罪を犯していることになる。あらゆる者に、他者の真実体験を聞かせ、倣わしめよ、これがアショーカ王の願いである。王は全ての宗教が他の宗教から学ぶことを望まれておられる。　アショーカ王碑文

◎近代思想の過ちを予言

まさに一切諸法は自ずから二法あることなしと観察すべし、而るに諸々の衆生、虚妄に是は此、是は彼、是は得、是は失と横計して、不善の念を起こし、衆の悪業を造って六趣に輪廻し、諸の苦毒を受けて、無量億劫自ら出ること能わず。　無量義経

◎折伏の態度に対する御指南

公場にして理運の法門申し候へばとて雑言、強言、自讃気なる体人目に見すべからずあさましき事なるべし、弥、身口意を調え謹んで主人に向うべし主人に向うべし。

教行証御書

◎他者に対するキリスト者の態度

キリストに従う人は、対話する相手と出会うとき、決して高ぶらず決して見下す事ない自分たちの主と同じように、柔和で謙遜な心を持たねばなりません。

ヨハネパウロ2世

◎大善への気づきを与える喩

汚染は私たちが刈り取るつもりのない資源に他ならない、私たちはその資源の価値を知らないから、撒き散らしてしまっている。

バックミンスターフラー

◎長者窮子喩にシンクロする歌

小さい頃は神さまがいて　不思議に夢をかなえてくれた
やさしい気持で目覚めた朝は　おとなになっても　奇蹟はおこるよ
カーテンを開いて　静かな木洩れ陽の　やさしさに包まれたなら　きっと
目にうつる全てのことは　メッセージ
小さい頃は神さまがいて　毎日愛を届けてくれた
心の奥にしまい忘れた　大切な箱　ひらくときは今
雨上がりの庭で　くちなしの香りの　やさしさに包まれたなら　きっと

目にうつる全てのことは　メッセージ
カーテンを開いて　静かな木洩れ陽の　やさしさに包まれたなら　きっと
目にうつる全てのことは　メッセージ

ユーミン

◎同体異心思考から異体同心思考へ

令和元年十月二十五日

岐阜教化センター長　日蓮宗国際交流会　会長　釋潮叡

平成三十年五月二十七日帰寂　恩師　叡生院法顕幸徳信士　に捧ぐ